



地理の写真館

高原の国、ボリビア共和国

「高原の国」と呼ばれるボリビア共和国（以下、ボリビア）の首都ラパスは、アルティプラノと呼ばれる高原に位置する。標高は4058m（理科年表）だが、市街は盆地で、約3200～4100mと標高差があるという。ラパスを取り囲むようにそびえるイリマニ山やイヤンプ山といった山々は、6000mを超える。ラパスの空港に降りると、空気の薄さを実感できる。空港の標高はおよそ4000mと、かなり高所である。いきなりこの高度にさらされると、誰もが高所障害の影響から逃れられない。そのため、街中の薬局では普通に高山病の薬が販売されている。このような環境ゆえか、ボリビアの先住民族の比率は、ほかのラテンアメリカ諸国と比べても、極めて高くなっている。

ボリビアの「憲法上の」首都はスクレになる（写真①）。標高は2790mまで下がる。1825年、この地で独立が宣言され、独立の英雄であるシモン=ボリバルの名前がボリビアという国名となったことはよく知られている。植民地時代の面影を残すスクレの街並みは、まるでスペインの田舎を訪れているような気分させる（写真②）。

スクレから150kmほど南下すると、かつて銀山で有名であったポトシに到る（写真③）。標高4070mは、都市としては世界最高所になるという。「富の山」の意の、セロ・リコ（Cerro Rico）では、銀が枯渇した現在でも、すずな

どの鉱物が24時間体制で採掘されている。暗く粉塵が漂う坑道内の作業は過酷で、作業員は空腹を紛らすためにココアの葉をかみながら作業に従事する。平均寿命も短い彼らの日給は、2004年当時のレートで3ドルほどだという。坑道内にはインディオの神の像があり、ココアの葉やアルコールが供えられている。キリスト教徒ではないのかとたずねると、彼らは自嘲気味に笑いながら答えた。「イエスの愛は地上だけに注がれる。地下にいる自分たちを守ってくれるのはインディオの神だけだ」と。

アルゼンチン行きの鉄道が発するウユニは、郊外に広がるウユニ塩原で世界的に有名である（写真④）。標高3660mに約12000km²の広大な塩の平原が広がる。まるで雪原のようなその景観は、ほかに類を見ない。塩原上にはサボテンが群生する島や、塩原から切り出された塩でつくられたホテルまである。

このような厳しい自然環境で、太古より生き抜いてきた人々のたくましさ魅了された。（静岡県高校教諭）

編集部より 文中の標高（10m単位で表記のもの）でとくに断りのないものは、Macmillan Centennial Atlas of the World を出典としました。

写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。海外巡検などで撮影された地理的写真を、資料編集部「地理・地図資料」係までお送りください。